

牧畜民アリアールの人びとと経験した 2007 年ケニア総選挙

内藤直樹*

混乱のなかのフィールドワーク

2007 年 12 月 27 日におこなわれたケニアの総選挙は、現職のキバキ大統領の「不正選挙疑惑」を契機とする大きな混乱をまねいた。この混乱にともなってケニア西部地域や沿岸地域および首都ナイロビなどで発生した暴動により、1,000 人以上の死者や数十万人規模の国内避難民や難民が発生した。このときわたしは、ナイロビから北に 400 km ほど離れたマルサビット県でフィールドワークをおこなっていた。わたしは 1999 年から牧畜民アリアールの集落に住み込んで、人びとの生業と民族アイデンティティの動態に関する調査をしている。住み込んでいた集落は最寄りの町から 40 km ほど離れた遠隔地に位置していたため、普段車がくることはほとんどなかったし、外部からの情報もなかなか入ってこなかった。ただ幸いなことに、調査地付近で暴動が発生することはなかった。

騒々しかった投票が終わった 2008 年 1 月初旬、わたしは集落の人びととラジオで選挙結果の発表されるのを待っていた。しかしラジオが伝えたのは首都ナイロビの政治的混乱や各地で発生した激しい暴動の様子についての生々しいニュースだった。わたしは、そう

したニュースを聞きながら、不安な日々を過ごしていた。また、町に行ってきた人びとからは、砂糖、穀物、ガソリンといった生活や調査に必要なさまざまな商品が入手できなくなったという話を聞いた。これらの物資のほとんどはナイロビ経由でやってくるのだが、混乱のために市場が機能していなかったからである。わたしは牧畜民の集落にいたので、乳が利用できるし、餓えることはないと思っていた。しかし、いざというときは車でエチオピアに逃げようと考えていたが、十分なガソリンが入手できそうにないことが悩みの種だった。結局この混乱は、国連のアナン元事務総長がケニアを訪問し、調停をおこなった直後から急速に解決に向かい、現在の与野党間の連立政権が誕生した。

与党・国民統一党 (PNU) を擁する現職のキバキ大統領は、ケニアでもっとも人口が多く支配的なキクユ族出身であり、対する野党・オレンジ民主運動 (ODM) のオディンガ氏はケニア西部の有力な民族・ルオ出身であった。ナイロビやケニア北西部の人びとの口からは「今回の大統領選挙はこれまでケニアを支配してきたキクユ対非キクユ全体の間の戦いである」という言説をよく聞いてい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



図1 調査地の位置と民族

た。すなわち民族への帰属が政治的な争点になった。そして「キバキ大統領が、選挙結果を操作し、不正に勝利した」という疑惑が、人びとの間に構築された対立意識に火をつけたのである。

このように2007年末の総選挙は民族主義を激化した。ところでケニアの総選挙では、大統領選と同時に国会議員選もおこなわれる。国会議員は210に区切られた小選挙区ごとに選出される。各小選挙区においても、与野党が候補者を擁立するため、激しい選挙運動が繰り返される。この選挙運動のなかで、これまで同じ選挙区のなかで共生的な関係を維持してきた調査地の牧畜民間の関係や民族アイデンティティのあり方が大きく変容した。それは乾燥地という予測が難しい環境

における牧畜生活に適応した状況依存的なアイデンティティが、固定的で均質なアイデンティティに変質する過程であった。

「予測が難しい環境」における「状況依存的なアイデンティティ」

わたしが調査対象としてきた牧畜民アリアルは、ラクダ放牧に依存した生活を営んでいる牧畜民レンディーレの一部と、ウシ放牧に依存した生活を営んでいる牧畜民サンプルの一部が集まってできた集団である。先行研究によればアリアルは、互いに異なる家畜に依存しているため資源をめぐる競合が少なかったレンディーレとサンプルが、共生的な関係を維持する過程で形成された [Spencer 1973]。アリアルは多くは、サ



写真1 アリアールの集落
(マルサピット県, 2007年)

ンブル語とレンディーレ語の両方を理解するが、日常的にはサンプル語で会話している。「アリアール」とはレンディーレ語による呼称であり、サンプル語では「マサゲラ」と呼ばれる。しかしこれまで、「マサゲラ」という単語の意味を知っているサンプルやアリアールは、一部の老人だけであった。

サンプル、アリアール、レンディーレの3つの民族が牧畜生活を維持していくためには、親族ベースの相互扶助関係が重要である。くわえてこの3つの民族の間には親族や民族の範囲をこえた相互扶助関係のネットワークがひろがっている。こうした越境的な相互扶助関係のネットワークは、個人や集団単位の移住を契機に形成された。アリアールの人びとは、このような越境的な関係のネットワークのなかで場面や状況に応じて自らのアイデンティティを表明してきた。

たとえば2002年の調査時に、調査地のアリアールの青年が家畜の群れを集落から遠く離れた地域に連れて行った際、その地域の集落の人びとが利用している放牧地と水場を利

用しようとした。しかしながら集落の長老たちは、青年に対して「おまえたちよそ者は、私たちの土地から出て行け」と言明した。ところが交渉を継続するうちに、青年が帰属する親族集団と長老が帰属する親族集団との間に越境的な相互扶助関係があることがわかると、青年はその関係を強調し、結果的に放牧地と水場の一時的な利用が認められた。

このような状況依存的なアイデンティティは、予測が困難な環境で牧畜を継続するうえで重要な生業戦略のひとつとして評価できると考えられる。ケニア北部のような乾燥した生態系の特徴は、単に「乾燥している」というよりも、むしろ「いつ・どこに雨が降るのかを確実に予測できない」ところにあることが明らかになっている [Scoones 1996]。牧畜民はこうした生態環境のもとで家畜とともに臨機応変な移動をくり返す過程で、他集団や他民族の土地や資源を利用する必要に迫られる。状況依存的なアイデンティティは、そのような他者の土地や資源の利用にともなう軋轢や紛争の可能性をへらし、土地や資源への柔軟なアクセスを可能にしてきたのである。

国会議員選挙と新たなアイデンティティ

しかしながら、2007年の総選挙時に、アリアール出身の国会議員を支持する若者たちの一部が「自分たちはレンディーレと明確に異なる民族集団『マサゲラ』である」と主張しはじめた。アリアールとレンディーレはともにライサミス選挙区で生活している。この選挙区の住民のほとんどはレンディーレとア



写真2 国会議員選挙の運動員によるアリアールの集落の貯水槽への給水（マルサビット県, 2007年）

リアールである。ライサミス選挙区では与党・国民統一党（PNU）がアリアール出身の候補者を、そして野党・オレンジ民主運動（ODM）がレンディーレ出身の候補者を擁立し、熾烈な選挙運動を展開した。とくに2007年12月27日の投票日やその直前には、両陣営は演説や歌をがなりたてるスピーカーを搭載した4WDの車やトラックで昼夜を問わず集落をまわり、激しい選挙運動を展開した。その際、人びとの歓心を得るべく、お金や食料、水などを提供することも忘れていなかった。

ところでライサミス選挙区を含む北ケニアの複数の選挙区では、2005年にも国会議員の補欠選挙がおこなわれていた。北ケニアの民族紛争の調停に向かった現職国会議員たちが任期中に飛行機事故で死亡したためである。つまりライサミス選挙区では選挙運動が2005年から2007年にかけての約2年間にわたって継続したことになる。死亡した国会議員はレンディーレ出身だった。多くの人の

びとが、補欠選挙の勝者は死亡した国会議員の妻だと予想していた。ところが、このときアリアール出身の候補者が国会議員の座を勝ち取ったのである。この結果は、レンディーレにおおきな衝撃をあたえた。そして候補者たちと、彼らを支持するアリアールやレンディーレの運動員たちは、この補欠選挙の直後から今回の総選挙にむけた選挙運動を開始していた。

また2006年にはアリアール、2007年にはレンディーレで、約14年ごとに執行される集団割礼儀礼がおこなわれた。集団割礼は基本的に親族集団単位でおこなわれるため、この時期はアイデンティティの状況依存性が低下する。なぜなら、普段はさまざまな地域に居住している人びとも、割礼儀礼に参加するため、自分の親族集団の集落に集まるからである。逆にいえば、この時にどこの集落で儀礼をおこなうかによって、親族や民族アイデンティティが決定される。国会議員選の候補者たちは、アリアールやレンディーレの支持を得るために、割礼の援助として移住用の車の手配や金銭・物品の提供などをおこなった。その結果、割礼というローカルな文化的実践が、選挙という政治的資源をめぐる戦いに強く結びつけられたのである。その過程で1)「マサゲラ」はレンディーレとは異なる文化をもつ集団であり、2)レンディーレに比して不当な政治的扱いを受けているとする言説が流布した。

たとえばアリアールの国会議員候補を支持する運動員たちは次のような演説をおこなった。「これまでのレンディーレの国会議員は、

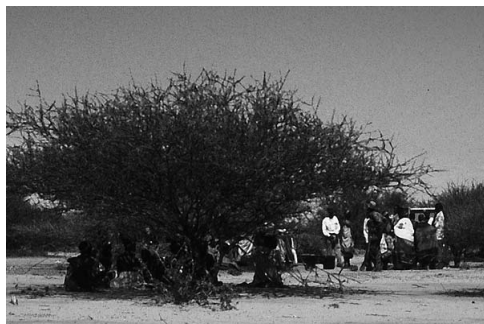


写真3 国会議員選挙の投票をおこなうアリアールの人びと（マルサビット県, 2002年）

私たちの陳情を聞いてくれなかった。なぜなら私たち『マサゲラ』はサンプル語を話す。レンディーレ語はうまく話せない。だから私たちの言葉で直接対話することができる国会議員が必要だ。」こうした演説が繰り返されることで、レンディーレと対立的な利害関係をもつ均質で固定的な「マサゲラ」アイデンティティが構築された。

これまでの状況依存的なアイデンティティにもとづくアリアールとレンディーレの相互扶助関係は機能しにくくなった。たとえばあるレンディーレの長老は、「アリアールに貸していたラクダを強制的に回収する」と発言した。また、アリアールの集落が分裂するという事態も生じていた。もともとアリアールの集落には、レンディーレやサンプルからの移民やその子孫も暮らしている。しかしながら、これまで人びとは集落内の「異民族」の他者性を強調しないように努めてきた。ところが2007年の総選挙時には、選挙運動員を中心とする教育をうけた人びとや財・権力をもつ人びとが、こうした集団内の差異を強調し、それを政治的立場の差異に結びつけるよ

うになった。このような民族や親族集団への帰属意識の道具的な利用は、これまで共生的な関係を維持してきたアリアールとレンディーレの間に大統領選と同じ民族主義的な対立構図を構築した。

しかしながら選挙後、アリアールやレンディーレの人びとは独自のやり方で、構築された敵対意識を無化しようとしていた。ナイロビでの混乱が小康状態となった2008年2月に、わたしはあるアリアールの長老に、彼が住む集落を構成する各家族の移住史についてインタビューした。その集落は国会議員選挙時に生じた成員間の対立によって2つに分裂していた。長老は分裂した集落の人びとの家族史について言及する際に躊躇した。なぜならその家族はもともとレンディーレからの移民であり、そうした人びとのオリジナルの出自を暴露することは、彼らの他者性を強調し、集落から排除することを意味するからだ。ところが、その場にいた教育をうけた選挙運動員の若者は、「言ってしまう、隠すことは何もない。私たちアリアールはアリアールの候補者に投票するべきだ。しかし、あいつらはもともとレンディーレである。だからレンディーレの候補者を支持するのだ」と発言した。このように教育を受けた若者は、歴史的差異と政治的態度の差異という2つの異なる「差異」を結合する民族主義的な発言をおこなった。しかしながら長老は集落の分裂後でさえも、外部者のわたしに対して、人びとの間に存在する歴史的差異を隠し、状況依存的なアイデンティティを維持しようとしていた。

選挙の経験がもたらした新たな研究のタネ

2007年のケニア総選挙時に、北ケニア・ライサミス選挙区には「マサゲラ」という新たな民族アイデンティティが出現していた。それは国会議員という政治的資源をめぐる争いのなかで、サンプルとレンディーレの境界におけるゆるやかな文化共同体・アリアルが、明確な輪郭をもった文化・政治共同体「マサゲラ」として再編される過程の一部だと考えられる。そしてそれは、これまでの民族や親族間の越境的な相互扶助関係が弱体化したことを意味した。しかしながら、これまでアリアルが越境的な相互扶助関係のなかで維持してきた状況依存的なアイデンティティは、予測が困難な環境における生計維持戦略のひとつとして重要である。それゆえ激しい選挙運動が終わった時、一部の人びとは選挙によって均質化・固定化したアイデンティティを再び状況依存的なものに「修復」しようと努めていた。とはいえ今後も数年おきに展開される選挙運動は、アリアルやレンディーレの状況依存的なアイデンティティをさらに固定化・均質化していくと予想される。このように牧畜社会の人びとが国家に包摂される過程でアイデンティティの状況依存性が失われれば、予測が難しい環境における牧畜生活を継続することがますます難しくなるであろう。とはいえ人びとが牧畜生活

を続けていく以上、これまでの状況依存的なアイデンティティに替わる「他者との共存の論理」が必要である。それがどのようなものか、わたしにはまだわからない。ただ今回の経験は、ケニアに210ある小選挙区のそれぞれで、民族主義的な対立構造が構築されていることを示唆している。そして各選挙区の人びとが、選挙後の対立構造を解消するために、さまざまな努力をおこなっているとすれば、そこから学べることは多いのではないだろうか。いわば選挙の比較民族誌的研究を通じて、ケニアの人びとの「他者との共存の論理」のあり方について考えることができるかもしれない。長期にわたってフィールドワークを続けるなかで予想外の混乱に巻き込まれたときに、研究のタネをひろうということもあるものだと感じた調査だった。

本稿は京都大学グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」ナイロビ・フィールド・ステーションホームページに掲載したコラムに加筆・修正したものである。

引用文献

- Scoones, I. 1996. *Living with Uncertainty: New Directions in Pastoral Development in Africa*. London: Intermediate Technology Publications.
- Spencer, P. 1973. *Nomads in Alliance: Symbiosis and Growth among the Rendille and Samburu of Kenya*. London: Oxford University Press.